

2020年度 第4回 ライフステージ事例検討会 報告書	
日時	2020年10月6日(火) 17時45分～18時45分
開催施設 参加者数	金沢大学6名、富山大学0名、福井大学4名、石川県立看護大学6名、信州大学3名、 金沢医療センター0名、石川県立中央病院8名、小松市民病院3名、浅ノ川総合病院0名、 公立松任石川中央病院4名、恵寿総合病院2名、 富山県立中央病院2名、富山県済生会高岡病院4名、金沢医科大学氷見市民病院6名、 富山労災病院0名、市立砺波総合病院0名、 長野赤十字病院0名、飯田市立病院0名、諏訪赤十字病院0名 会場参加 計48名 その他 個別のオンライン参加 計59名 合計107名
テーマ	「終末期がん患者の子どもの生活支援体制を整える上での人や関係機関との調整」
発表者	福井県済生会病院 松本 友梨子さん
【意見交換内容】	<p><質問> 家族サポートの内容について質問がされた。それに対し、「コロナ禍であったが、母の状況が悪いため面会許可をしていた。しかしあまり来なかった。部屋に入っても近づこうとしない。うまくコミュニケーションをとれなくなった母に直面できない様子であり、自分を保つために距離を置いているのではとアセスメントしていた。娘の面会時は一緒に部屋にるようにした」と回答があった。</p> <p>BさんへのIC状況について質問がされた。それに対し、「Aさんにどこまで話すか聞いていた。娘が知りたいと思うところまで伝えてOKとしていた。気持ちを聞きながら情報提供していた。だれかサポートできるよう同席していた」と回答があった。また、その時の様子について質問がされた。それに対し、「口数の少ない子で淡々と聴いていた。気持ちを表現しないため心配であったいつでも話聞くと伝えつつ、積極的にはいかなかった。看取りのときは、初めて泣いていた」と回答があった。</p> <p>義姉の家に住むのはBさんが自分で決めたのかという質問がされた。それに対し、「各選択肢を出したが、Bさん自ら決めた」と回答があった。</p> <p><論点> 1) 複雑な状況に置かれている患者家族の抱える問題の本質を明らかにするポイントは何か。 2) チームワークに必要な要素は何か。 ・状況として、Bさんの養育はAさんから義姉に移行していくにあたって、Aさん、Bさんだけでなく、Aさん、Bさんとりまく人も義姉と新たな関係を築く段階だった。 親子サポートする人は存在するものの互いに横のつながりは十分でなかった。 ・義姉からは「あまり話してくれない。」「進学就職もあるがそのことも話さない、母親(Aさん)に会いに行かない等、気になる事があったがBさんは話してくれない。」との訴えが聞かれた。病院スタッフとしては、どうかかわったらいいのかの相談にのり生活全般サポートいただくようにした。</p> <p><論点に対する質問> 各機関の役割について質問がされた。それに対し、「横のつながりをつなぐ目的で、カンファレンスを行った。その結果、その後の対応として、チームカンファレンス病院スタッフは各関連機関の調整窓口、Bさんの心理的サポート、義姉のサポート、A氏友人はBさんの心理的サポート、児童相談所は定期訪問と、書類手続きを行うこととなった。高校は心理的サポート、各関連機関の調整窓口となった」と回答があった。</p> <p>Aさんのケア(ターミナルそのもののケア)について質問がされた。それに対し、「娘を一人遺していく何が医療者としてできるのかと悩んだ。亡くなる1か月はコミュニケーション取れなかったが、Bさんが安心して生活できるように整えることがAさんへのケアだと考えた」と回答があった。</p> <p>外来時のA,Bが話し合うための介入はどのように行っていたのかについて質問がされた。それに対し、「支援を図っていたがAさん自身に考えたくないと思っている時期があった。Aさん自身が自分の身体をとおして病状(死期)を感じたときに、Aさんから娘の生活について一緒に考えてほしいと言われた。」と回答があった。</p> <p>実父について質問がされた。それに対し、実父には声をかけたくない状況であるとの回答があった。</p> <p><まとめ> ・面会が少ないのは、AさんとBさんのこれまでの関係性による距離感とも考えられる。 ・自己表出が少ないBさんへの介入は困難であったと思われるが、言語化を促せるような積極的な関わりをしてもよかったと思われる。</p>
ミニレクチャー	「専門職間の連携・協働を目指すチーム医療」